鹿児島純心女子短期大学研究紀要　第32号，93－105　2002

カトリック祭服における刺繍史（Ⅲ）

―世俗刺繍及び人々との関わりを中心に―

濱　崎　千　鶴

A History of Catholic Vestment Embroidery （Ⅲ）
－Mainly relation of the secular embroidery and people－

Chizuru Hamasaki

刺繍の技術は，人々が衣服を身につけた時代からあったが，上質の素材と高度な技術でなされるようになったのは中世初期からであり，これが最高潮に達したのは13～14世紀である。
教会刺繍と世俗刺繍を比べると，最初，刺繍などの装飾は世俗刺繍に多く用いられていたが，ヨーロッパにキリスト教が浸透し，また教会が権力と富を手にした中世においては，教会刺繍が繁栄した。教会刺繍に使用されていた技法の多くはイギリスの刺繍であるオプス・アングリカムである。この刺繍の技術指導の多くは教会で行われていた。貴婦人や娘たちは教会でキリスト教を学ぶとともに刺繍の技術をも修道女たちから学び，腕を磨いていった。皇帝や貴族，聖職者などから注文を受けると，彼女らはその求めに応じて金銀糸，絹色糸を用いて熱心に刺繍を施し，宝石などを散りばめた。その豪華さはとどまることを知らなかった。
教会に寄贈する人々も製作に携わる人々もこのことを通して神に近づき，神にささげるものとして最高のものに仕上げ，そのことによって自らの信仰をも強めていったのではないかと考えられる。

Key words：［祭服］［教会刺繍］［世俗刺繍］

（Received November 5, 2001）

はじめに

刺繍は布の上に針と糸で多くの模様や形を表現できるものである。最も古いものとしては古代エジプト第１王朝（B.C2850～2750）の墓からビーズ刺繍の断片などが発掘されている。また第18王朝（B.C1580～1350）の墓からは色のついた織りや刺繍の文様が見つかっている。そして第19王朝までには衣類などに刺繍することが当然のようになり色彩も文様も数多く使われるようになってきている。第20王朝のラムセス３世（B.C1198～1167）の息子アメンホプセフの墓の壁画にはアメンホプセスが刺繍を施した赤いサッシュで腰を締めている姿が描かれている。

古代オリエントのバビロニアにおいては，カナケウスの房飾りが上流婦人の間で刺繍や毛糸の織り込みに変化して，衣服自体が華やかさを増し，アッシリアにおいては，王の衣装，貴人の宮廷服が刺繍や色織物の装飾を施すことによって次第に豪華になり，これらが好まれ発展し

＊　鹿児島純心女子短期大学生活学科生活学専攻生活ビジネスコース （〒890-8525 鹿児島市唐湊４丁目22番１号）

ていった。また，ペルシャにおいても，その服装はもとは革製であったが，後に織物製になりこれにも宮廷の華やかさに合うように数種の文様を刺繍したり織り込んだり，金で縁取りをしたりして益々豪華になっていった。

古代ギリシャの女性服であるヒマティオンは色調が豊かで刺繍が施されていたものもあり，また，チュニックにもしばしば全体に刺繍がなされていたようである。これらの刺繍や装飾は織り上がった布に貴婦人自らが好きなように施していたのである。

古代ローマにおいては，凱旋将軍や皇帝が着用していた緋紫色の地のトガ・ピクタに金糸の刺繍が美しく端にそって施されたり，布一面に絵模様が描かれた上に刺繍されていたりしていた。また，両肩にかかる幅広の帯にも刺繍されていた。帝制時代になると緋色あるいは白色のパルダメントゥムを含むマント類にもしばしば房飾りや刺繍などが施されていた。

その他古代アンデスにおいても，刺繍が用いられ鳥文様（B.C 3 世紀）や貫頭衣の文様（B.C 2 世紀頃）が発見されているし，モンゴルでもノイン・ウラの墓からラクダの毛皮でつくられた刺繍とアップリケで飾られているフェルトの敷物や毛織物にウール糸で刺繍されているものなども出土している。

このように刺繍は各国で行われていたものであり，起源･最初の発祥地は明らかではないが，早くから文様を作り出す重要な技法であったことは確かなことである。

衣服の起源説としてあげられるもののなかの１つに人間は基本的な欲求として美しいものを求める欲求をもっているが，これが衣服と結びついたという装飾説がある。また衣服を着用する目的の中には社会環境的な目的として個性・美意識の表現，身分の表現があるが，これらは先にあげた古代の例を見てもわかるように古今東西いずれを問わず言えることである。

しかし，長い歴史の流れの中においては美しさ・豪華さを求め続ける心とこれを抑えようとする相反する２つの心理が人々の中に働き，常に繰りかえされている。これは教会刺繍においても世俗刺繍においても同じである。特に世俗刺繍においては，まず13世紀にその後16,17世紀のフランスにおいて何度も贅沢禁止令あるいは他国からの輸入禁止令が発布されている。しかし，その度人々は別の方法で美しさを表現していた。つまり人々が求める優美さや豪華さはとどまることを知らなかったと言えるのではないだろうか。

一方，教会刺繍は中世以降権力と富を持ちすぎた教会のあり方を考え直すことによって華美なものから質素なものへと移行していった。この発端となったのは16世紀初期の宗教改革であるが，実際にデザインし製作していたのは世俗の人々であった。そこで今回は刺繍の発達・変化を見ると同時に製作していた人々，あるいは寄贈した貴族らの祭服に対する思いを見ることによって，中世において華美化された祭服の価値を明らかにしていきたいと考える。

教会刺繍と世俗刺繍の違い

① 教会のモザイク画等を通して（６～９世紀）

547年に建てられたラヴェンナのサン・ヴィターレ内陣奥のモザイク画には，ユスティニアヌス帝と司教（図１－１），テオドラ皇后（図１－２）のモザイク画がある。この壁画を見ると司祭らは細いクラビのついた袖口の広いダルマティカを着用し，聖マクシミアヌス司教はそ

の上にカズラと十字架のついたストラという実に簡素なものである。その反面，ユスティニアヌス帝の外衣パルダメントゥムには黄金地に赤い輪で囲まれた緑色の鳥が刺繍されている方形の飾り布タブリオンが付けられている。また，テオドラ皇后は裾や袖口が黄金やエメラルドで装飾された白いストラの上に紫色のパルダメントゥムを身にまとっている。そしてこのパルダメントゥムの裾は表裏とも金糸で装飾され，衿先には宝石入りの豪華な衿飾りが輝いている。また裾には救い主キリストを拝みに行く三人の博士の姿が刺繍されている。そして侍女たちは様々な文様が織り出された長いストラの上にパルラをショールのようにまとっている。

図１－１　ラヴェンナのサン・ヴィターレ内陣奥のモザイク画（547年）

図１－２

また549年頃に建てられたサンタ・ポリナーレ・イン・クラッセ聖堂のアプシスのモザイク画に見られる聖アポナリスの祭服もカズラには模様が見られるが，ダルマティカはクラビのみである。

実にこれらは当時の宮廷服の豪華さをうかがわせると同時にキリスト教の祭服がいかに質素なものであるか，その違いをはっきりとあらわしているものといえよう。

７世紀に入ると，皇帝は尊厳のしるしとして刺繍が施された袖つきのクラミュスを着用していた。一方，７世紀に建てられたサンタ・アニョーゼ・フォルル・ムーラ聖堂のモザイク画にあらわされている教皇ホノリウスと教皇シュンマスクの祭服はクラビのついたアルバに茶系のカズラ，その上に小さい十字架のついたストラである。また，サン・ジョヴァン・イン・ラテラーノの付属洗礼堂のモザイク画にあらわされている司教の祭服もほぼ同様である。

８世紀の皇帝像のものは，いっそう美しく紫の絹に金糸の輪で囲まれた青い鷲（ビザンティン帝国の象徴）が一面についており，そのタブリオンは金糸刺繍の間にたくさんの宝石がつくという豪華さである。あるいは豪華な錦織りで衿元・裾・腕の辺りに凝った刺繍が施されているものもある。

また９世紀に建てられたサン・マルコ大聖堂，サン・プラッセデ教会にあるモザイク画にあらわされている司祭の祭服もアルバにクラビ，ストラに十字架が装飾されているだけである。このように６～９世紀の教会の壁画に残されている司教たちの祭服とビザンティン時代におい

ての皇帝や婦人たちの衣装とを比べてみると，中世において教会が権力と富とを持ち，その祭服も豪華絢爛たるものであることに対して，まだこの時代は皇帝の威厳や権力をあらわす衣装の豪華さに比べると祭服は質素であり，この２つにはかなりの違いがある。幸いなことに，９世紀頃のものと思われる実物資料があった。それはベルギーで発見された850年頃のものとされるアングロサクソンの祭服の断片とシャルルマーニュ（カール大帝768～814）のものとして伝えられている９世紀頃のダルマティカ（図２）がある。祭服の断片は麻地に金糸と絹色糸で刺繍され縁飾りがついている。そして金糸は馬毛を芯に純金の針金が巻かれている。一方ダルマティカには全面に刺繍が施されている。王座に座すキリストを中心に上方に天使，下方に聖人ら，そのまわりに十字架や植物模様，両袖口には３人の人物，両脇下にも人物がいる。銘や紋章と思われるものも見られる。残念なことに祭服に施されているデザインを目にすることはできないが，材料から判断するとかなり上質のものを使用していると思われる。ダルマティカの方は皇帝のものであるのにキリスト教を題材としていることを思うと，皇帝と教会との関わりが深くなっていることが読み取れるであろう。

図２　シャルルマーニュのものと伝えられるダルマティカ（９世紀頃）

以上のことから，313年ミラノ勅令によって国教となったキリスト教は徐々に人々の精神を支配し，生活のすみずみまで浸透し，その深まる宗教感情は，人々の服飾の上におのずから反映していったと考えられる。

ビザンティンの服飾は，東洋の影響を強く受けると同時に，人々の神へのあこがれ，神の光を求めて神秘的な光輝く世界を金銀糸で刺繍し宝石などを散りばめることで表現しているものである。つまり宝石や金銀の装身具，金糸や銀糸による刺繍は単なる装飾性を超え神からの光，神の真理そして唯一の神に近づこうとする高い精神を求めていることのあらわれといえる。また，ビザンティン帝国の心髄となったキリスト教によって，すべてが厳粛で多彩に彩られていったのである。これは聖なる神に対して人間は罪深き者であるから，神に対する畏敬の念を表す衣服や装飾品を身につけることで，自分たちが清く聖なるものと変えられるのではないかという思いが人々の中にあったことのあらわれであろうと思われる。

② 実物資料・絵画を通して（10～14世紀）

先述したアングロサクソンの祭服の次に残存している古い祭服は聖カスバートのストラとマニプルス（909～916年）（図３）である。これらには９世紀以前のモザイク画と比べものにならないほどの豪華な刺繍（諸聖人，聖職者，予言者とその名，その上下には渦巻き状の多年草）が施されている。その技法はかなり高度なもので，絹の色糸を用いてステム・ステッチ，スプリット・ステッチ，絹芯に純金糸を用いたコーチド・ワーク，そして縁飾りがなされている。一方グレゴリウス教皇教簡集に描かれているオットー２世の衣装（図４）はローマ皇帝の後継者としての威厳をあらわすものとして意識的にビザンティン様式を取り入れたものであるが，

手首，上腕，裾には豪華な刺繍がなされており，上のマントにも柄が入り，縁取りがなされている。

実物と絵画とを比べることに対して無理があるかもしれないが，突如として豪華な刺繍が施されている祭服が見つかっている。それ以前までは実際どうだったのか定かではないが，皇帝服などに刺繍が施されているのであるから技術，技法は身についていたはずである。何がそうさせたのか。先述したように神に対する人々の思いと美しさへの欲求が重なりあったのではないだろうか。そしてこれ以降祭服に施される刺繍は豪華，優美さを増していき，技法もますます高度なものとなっていくのである。

11世紀の世俗刺繍の中で最高傑作のものは，バイユーのタペストリーである。タペストリーとはつづれ織という意味であるが，この作品は実際には刺繍である。約50cm幅で70mもあるこの刺繍は，1066年のノルマンディー公ウィリアムがイングランドを征服した物語を描き出したもので，バイユーの司教の注文で1070年頃にイギリスで製作されたものであろうと考えられている。麻地に８種類の色染めしたウール糸でステム・ステッチ，レイド・ワーク，コーチド・ワークの技法を用い刺繍されたものである。

11世紀皇帝の衣装としてはハインリッヒ２世の戴冠式用のチュニック（図５）がある。このチュニックはドイツの王権の紋章の一部をなしている。当時のチュニックは丈が少し短くなり，膝上のものも多くなってくる。またその首まわりやカフス，裾にはおそらく鳥だと思われるが円環文様の中に刺繍が施されている。

教会用として現存しているもののなかに，ストラがあるが，これは絹の綾織物で円環の中に様式化された植物の文様が織り込まれ，深青，白，赤の房飾りがついているだけであり刺繍はなされていない。しかし，現在ドイツのハンベルク大聖堂に保存されている聖女クネゴンテのマントには絹と金糸で円環文様の中に聖母子や聖書の人物が刺繍されている。また円環文様の中に一対の鳥をおき，まわりをアラベスク風の文様で埋めている聖ベルナールのカズラの断片が残存している。（図６）この円環文様は，この時期のビザンティンのテキスタルデザインの特徴である。この基本は世俗刺繍においても教会刺繍においても，また織りであっても同じように用いられていることがわかる。つまり，基本の文様となるものには違いがなかったということである。ただしどれだけ刺繍を施すかという分量の違いから見ると教会刺繍の方が多いといえるであろう。

12世紀のものとしては，神聖ローマ帝国の戴冠式のマントがある。元来このマントはシチリア王ルッジェロ２世の戴冠式のマント（図７）であったが，婚姻関係により数世紀にわたって，神聖ローマ帝国の戴冠式に用いられていた。赤のシルク地に金糸と粒真珠を用いて，中央に聖樹（なつめ椰子），左右にラクダを襲う獅子が刺繍されている。裏地は金地で人物像が織り出されている。

教会用としてはスペインのジローナ大聖堂にある天地創造の刺繍があるが，これは教会内の壁掛けあるいは幕として使用されていたようである。365cm×470cmといった大画面をウールの色糸で刺繍している。天地創造と題されているようにこの作品の模様は，中央に聖なる神を中心に聖霊の鳩，光と闇の分離や日と月，動物，人間の創造などをはじめ創世記にしるされているような世界の創造の様子を表現している。

また聖トマス・ベケットのカズラ，ボニファティウス８世のカズラもあり，これらにはメダリオンの中にグリュプス，動物，鳥そして人物像が刺繍されている。聖人の殉教を描き出しているミトラ，旧約･新約聖書の場面と，予言者，使徒などを刺繍しているカズラ(図８)もある。

この時代にはこれらの作品を通して，刺繍する人，デザインをする人々の技術が向上していることがわかるであろう。実際教会刺繍に多く用いられているイギリス刺繍の技法オプス・アングリカムは13～14世紀にかなり発展・発達し各国からの注文があとをたたなかったようである。このことを証明するかのように1295年のヴァチカンの財産目録には百以上のイギリス刺繍の例を記録しているということである。であるから12世紀はこの前兆であったはずである。

図３　聖カスバードのマニプルスの断片
(909～916年)

図４．グレゴリウス教皇教簡集に描かれているオットー２世
(10世紀)

図５．ハインリッヒ２世の戴冠式用のチュニック　(11世紀)

図６　聖ベルナールのカズラの断片（11世紀）

図７　ルッジェロのマント
(12世紀)

図８　金銀糸で中央と首まわりに人物像を刺繍している絹のカズラ（12世紀）

13世紀のものを比べてみると，まず世俗のものとしてあげられるのは13世紀後半イギリス王家の一員のためにヘンリー３世の甥エドマンド・プランタジネットの妻マーガレット・ド・クレアが注文したとされるクレアのカズラがある。これは後に教会に寄与されたものと思われるが，このカズラには幾何学的な四葉の中にキリストの磔，聖母子，聖人らが，また葉の渦巻き文様とともにライオン，グリュプスが金糸，銀糸，絹糸で豪華に刺繍されている。

図９　マシュー・パリスの素描より大司教（13世紀）

図10　マシュー・パリスの素描より王（13世紀）

図11　エドワード３世の馬の鞍敷きの一部（14世紀）

図12　シオンの外袍　ロンドン製　（1300～20年）
麻地に銀糸，絹糸刺繍

図13　金糸と絹糸で刺繍されたミトラ（14世紀末）

教会用としてダルマティカ，カズラ，コープなど多くの遺品が残存している。これらには前世紀と同様聖書の場面，聖人，動物，鳥などの刺繍が施されている。また1236～66年にウィンチスターの司教であったウォルター・ド・カンテループのものとされる墓から発見された脚袢の断片がある。これには唐草文様の中に王の像が金糸，銀糸で刺繍されている。9世紀のところでも述べたが，この13世紀にも王家のものでありながらキリスト教に関連するものがデザインされている。

図9と図10は13世紀のマシュー・パリスの素描として現在イギリスの大英博物館に保存されているものである。図9はカンタベリーの大司教聖エドワードであろうとされているが，彼は豪華なミトラ，オーフリーのついたアミス，小さな十字架文様で装飾された細いポール，重々しい菱形文様と縁飾りがあるダルマティカ，横縞と房飾りのあるチュニクル，飾りのついたアルバを着用している。一方，図10は王の素描である。彼は，フランク王の戴冠式の際に王権を象徴する笏として用いていたとされる白百合の紋章がついた細長い杖を持っている。そしてリスの毛皮をつけた緑のクロークの下に13世紀に典型的な段模様の装飾（青地に金の白百合を散らしたもの）のある宝石つきのダルマティカを着ている。先細の袖は身頃と一続きで祭服風の衿のところでギャザーを寄せている。またバックルつきのベルトには長い垂れがある。この2つの素描を比べてみるとどちらも豪華な刺繍，装飾がなされ威厳と地位の高さをあらわしている。ただし司教の方が着用枚数が多い。

14世紀の遺品としてはエドワード3世の馬の鞍敷きの一部（図11）がある。赤いベルベットに豹の紋章とこの豹の間に植物と人物の小紋が華やかに刺繍されている。またかなり損傷しているが，プランタジネット家のエドワード王子のジポンも現存している。これにはイギリスとフランス王家の紋章が金銀糸で刺繍されている。その他，物入れや財布として使われていたオーモニエールに刺繍を施したものがある。宮廷恋愛や歌謡を主題にして人物を配したデザインは実に当時の細密画や象牙彫をおもわせる精緻さである。

教会用としてはストラ，コープ，カズラ（図12），ミトラ（図13），また装飾用としてこれらにつけられていたオーフリー，アパレルなど前世紀に比べると数多く残存している。これらの祭服には旧約聖書に出てくる王や予言者，キリストと聖母の生涯，そして使徒や聖人たちが金糸，銀糸，絹糸を用いて美しく表現されている。

こうして見てくると教会刺繍が時の流れとともに世俗刺繍の豪華さに近づき，ついにはそれ以上に宗教的意味合いをもって遥かに超えていく様子がうかがえる。

寄贈された祭服

①世俗の人々から教会へ

キリスト教が公認される前，キリスト信者たちは迫害を受け，殉教する人々が子供から大人まで男女を問わず数多くいた。公認後もキリスト教迫害がまったくなかったわけではないが，教皇あるいは各地の司教と国王，貴族との関係は時が経つにつれ親密なものとなっていった。貴族らは教会に土地や財産を寄進するようになり，また豪華な祭服を寄贈している例もいくつかある。

まずフランク王シャルル・マーニュ（768～814）はメッツの聖堂に羽を広げた大きい鷲（鷲のつめは伝説上の生物によってかまれている）が刺繍されているコープを贈っている。黄，青，緑の糸を使いうまく表現している。

先述したイングランドのダラム聖堂にある聖カスバードのストラとマニプルス（図３）はウィンチスターの司教であったフリズスタンのためにイルフレッド王女が注文したものである。この祭服には１つの像の上段に他の像を順次配置することによって垂直の連続文様をつくる装飾法を用いて予言者や聖人たちを錦織の地に絹糸を用いて刺繍が施されている。

ドイツの皇帝ヘンリー（973～1024）はライスボンの教会にオプス・アングリカムの技法で刺繍された布を贈り，またローマの聖ペトロ大聖堂にもすばらしい刺繍布を贈っている。

フランスの王ヒューカペー（987～996）の妻であり有能な針仕事の技術を持っていたアデライス女王は，ツールの聖マルチン教会に豪華な刺繍を施したコープを寄贈した。このコープの前にはキリストが刺繍され，後ろにはケルビムとセラフィムに囲まれている神の姿が描かれている。

ハンガリーのステファノ１世（997～1038）は1031年聖マリア教会にハンガリー王の戴冠式用のコープを贈った。彼の妻は儀式用のコープを製作することで有名であった。このコープも彼女が製作したのかもしれない。このコープは深紅色の染料で染められ，濃紺の絹綾織で金糸刺繍が施されている。祝福を与える勝利のキリストと福音書をもち栄光の座についているキリストがデザインされ，そのまわりには予言者，使徒，殉教者が刺繍されている。また贈り主である王と女王の肖像が描かれているメダリオンもある。王の戴冠式のために製作されたものであるのに，キリスト教関係のものが刺繍されているということは当時キリスト教がかなり浸透していたことをあらわすものであると思う。

皇帝ヘンリー２世（1002～24）の星のマントと呼ばれていたコープは現在バンベルクの教会の宝庫に保存されている。このコープは王の戴冠式のために1010～20年頃，南ドイツで製作されたものであるが，西方と東方の影響を受けて，濃い青紫の絹綾織に天体のシンボルとともにキリストの生涯やギリシャ神話の場面を，金糸を用いコーチド・ワークの技法で刺繍が施されている。後に彼あるいは彼の妻がこれを教会に贈った。また金糸で刺繍されたカズラも贈ったとされている。

11世紀，ウィリアム１世の王妃マチルダはカーンの聖堂に彼女自らが着用していた豪華な金糸刺繍のマントを祭服の１つであるコープとして，また紋章つきの彼女自身の金の帯を高い祭壇の上に吊るすために寄贈している。

ここで気づくことは，彼ら自身が着用していたものを教会に贈っているということである。それも贈られたものは一番良いものであったはずである。なぜなら，これらは戴冠式のために特別に作られたものだからである。ここに神には最高のものをという彼らの心の動きが見られると思う。

また現存している祭服には紋章あるいは銘がしるされているが，それから判断すると，まず先述したクレアのカズラがある。その他，ロンドンのセント・ポール大聖堂の後援者であったウォキンド家のマント（1315～35製作）（図14）やハードルフという一族が注文したとされる祭服用の装飾布（1320～40製作）（図15），バットラー・ボードン家の所蔵であったマント（1330

図14　カズラの装飾　ロンドン製
（1315～35年）麻地に銀糸，絹糸刺繍

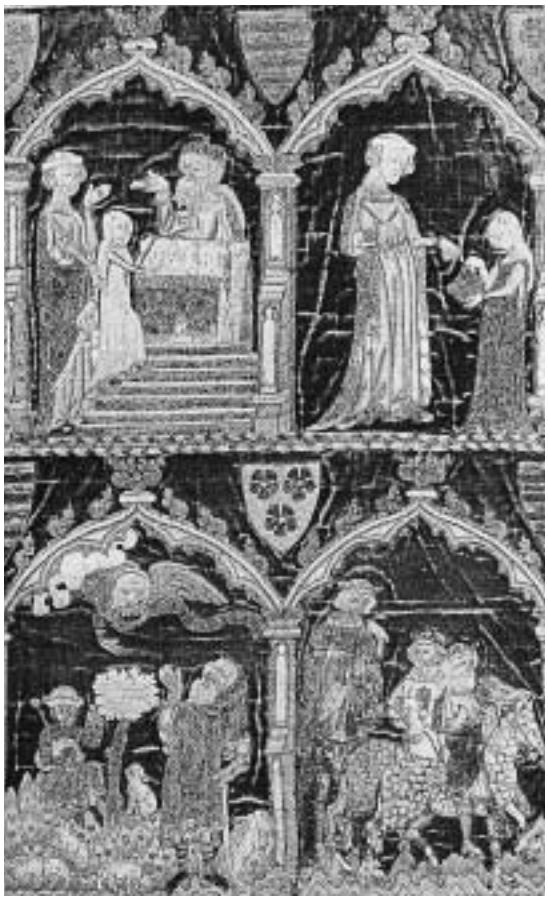

図15　祭服の装飾の部分　おそらくロンドン製
（1320～40年）ビロード地に銀糸，絹糸刺繍

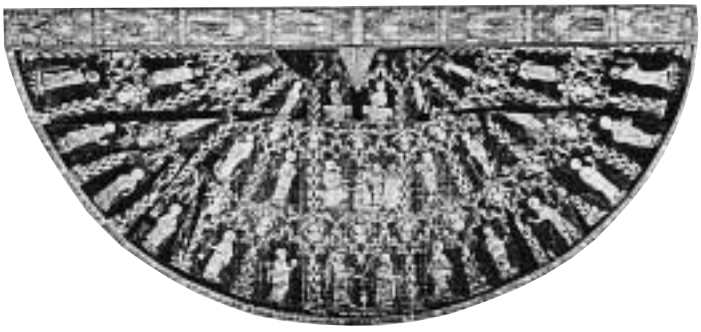

図16　ジェスの外袍　おそらくロンドン製
（1295～1315年頃）ビロード地に銀糸，絹糸刺繍

～50製作）（図16）などがある。これらはすべて教会刺繍が繁栄していた時代のものであり，実にみごとな刺繍が施されている。

以上，皇帝･貴族から教会に贈られたものをあげてみたが，いずれもすばらしいものである。彼らの教会・神に対する畏敬の心が，また一番良いものを教会に捧げたいという思いがうかがえるのではないだろうか。もし彼らが教会に土地・財産・祭服などを寄進・寄贈しなければ教会の財産も少なく贅沢な生活もなかったのかもしれない。また，彼らが祭服を寄贈しなければ注文をうけてデザインしそれを刺繍で表現する人達の信仰心も強まることはなかったのではないかと思う。少なからず彼らは祭服あるいは教会用の装飾布などを手がけることで，聖書の理解を深め，自らの信仰を堅固なものとし，神に近づく一歩としていたのかもしれない。

②教皇から教会へ

皇帝や貴族が教会に祭服を寄贈していた同時期に教皇自らも諸教会に祭服を贈ったという記録がいくつかある。まず，教皇ベネディクト９世（1032～44）はボローニャにオプス・アングリカムのコープを寄贈している。その後かなりの時が経つが記録によると，教皇ニコラス２世（1277～80）はローマの聖ペトロ大聖堂にオプス・アングリカムで装飾された２枚のカズラと１枚のコープを与え，教皇ニコラウス４世（1288～92）とボニファチウス８世（1294～1303）も彼らが選んだ教会にオプス・アングリカムの祭服を与えている。教皇クレメンス５世（1305～14）はコープを贈り，これは現在も残っている。教皇クレメンス６世（1342～14）もオプス・アングリカムのものを聖ペトロ大聖堂に与えている。1462年に教皇ピウス２世（1458～64）はピエンツァにオプス・アングリカムのコープを寄贈している。教皇ベネディクト９世と教皇ピウス２世が贈ったコープはいずれも大きな半円のマントで全面が聖書や聖人の物語の各場面でみごとに刺繍で埋め尽くされている。

これらに共通していえることは先述したように13～14世紀つまりこの時代に一番発展し他国からも注文がたえなかったオプス・アングリカムの技法で施された祭服を贈っているということである。これができたのは同時期に教会の権力と富が最高潮に達していたからなのであるが，教皇らも世俗の人々と同様に，いやそれ以上に神に仕えるものとして最高のものを用いて神を礼拝し賛美することを重要視していたのだろう。またこのことによって，良きにつけ悪しきにつけ教会も発展し，受け入れられていったにちがいない。

おわりに

刺繍は最も古い装飾方法の１つであるが，特に中世においては，教会においても世俗の世界においても技術が発達し，素材も良質のものを使用することによって，より豪華絢爛なものとして広がっていった。刺繍はヨーロッパ各地で製作されていたが，先駆けとなり最も重宝がられ各国から競って求められたのが，イギリスのオプス・アングリカムであった。そして教会が富と権力を手にしていた中世の間，教会刺繍で最も用いられていた技法も今まで取り上げてきたものから明らかなようにオプス・アングリカムであった。

教会は人々を神の救いへと招き導きいれる場所として大切であったばかりでなく，織物や金属細工，そして刺繍などの手工芸が伝授された場所でもあった。貴婦人や娘たちは主としてこ

こで指導を受け，技術を身につけたのである。彼女らにとって教会や修道院はもしかすると唯一の憩いの場所となっていたのかもしれない。彼女らは衣服を織る他に教会用の幕や祭壇布そして祭服を作ることに熱心で，心に深く刻みつけられたキリストやマリアの聖像，あるいは旧約聖書の物語，聖人らをみごとに織り出したり，色糸を用いて刺繍したりして完成していくところに至上の喜びと憩いを見出したのであろう。とすると手工芸の技術が彼女らの精神的な救いというささやかな趣味として発達したのも当然なことと言えるのではないだろうか。

このようにして彼女らの手によって教会を飾ったり，祭服に用いられていたオプス・アングリカムだが，ヘンリー８世の宗教改革により突如として中断されたのである。これ以降，オプス・アングリカムの技術は徐々に衰退していった。このことは実に残念なことであるが，教会刺繍が華美なものから質素なものへとなっていったのは神が望んでいたことにちがいない。なぜなら，神はひとり子イエズス・キリストを通して神の愛，よき訪れを告げ知らせることと同時に貧しく生きること，たとえ貧しくあっても神に信頼して生きることを私たちに求めているからである。

しかし教会刺繍を発展させたオプス・アングリカムを通して人々，特にこれを手がけた女性たちが教会へ導かれ，自らの信仰を育てていったこと，また完成した作品を目にした人々の信仰心をも強められたであろうことを考えると，中世における教会が権力と富を持ち，これが祭服の華美化となったものであっても一概に悪とは言えないのではないだろうか。つまり中世の人々の信仰の現われとしてみるならば，祭服を寄贈することも豪華な刺繍などの装飾を施すことも素晴らしい表現の仕方であると思われる。

図版出典

図１・４・５・９・10

ミリア・ダヴェンポート著　元井能訳 『服装の書Ｉ』 関西衣生活研究会　1993年

図２・８・13

フランソワ・ブーシェ著　石山彰監修 『西洋服装史』 文化出版局　1973年

図３

David Black ＆ Raymond Kaye ； Ther royal school of needlwork Book of needlwork and embroidery.　London, 1986.

図６・７・11

辻ますみ著 『ヨーロッパのテキスタイル史』 岩崎美術社　1996年

図12・14・15・16

ドナルド・キング監修 『ヴィクトリア＆アルバート美術館　イギリスの染織　第１巻　中世－ロココ（1200～1750)』 学習研究社　1980年

参考文献

パスカル・セッセ著　日向あき子訳 『服飾の歴史－その神秘と科学－』 美術出版社 1971年 ５版

板倉寿郎著 『服飾美学』 弘学出版　1982年 初版

佐野敬彦著 『織りと染めの歴史－西洋編』 昭和堂　2000年 初版第２刷

Kay Staniland；Medival craftmen embroiderers.　North America, 1991.
Mary Eirwen Jones；A history of western embroidery.　New York, 1969.
Mayo Janet；A history of Ecclesiastical dress.　New York, 1984.
濱崎千鶴著　『カトリック祭服における刺繍史』　鹿児島純心短期大学研究紀要 第28号 1998年
濱崎千鶴著　『カトリック祭服における刺繍史(Ⅱ)－キリストの象徴である十字架・モノグラムを中心に－』　鹿児島純心短期大学研究紀要　第29号　1999年